

いんば沼

《第38号》



提供：鈴木 康雄氏、印西市山田在住、「写友いには会」主宰

***** Contents

- 白井八景 —詩歌の楽しみ—…………… 村上 勲
- いんば沼の特定外来生物…………… 高山 順子
- いんば沼 —ここ数年間における水質悪化の原因—
…………… 本橋 敬之助

***** Contents

公益財団法人 印 旛 沼 環 境 基 金

<http://www.i-kouiki.jp/imbanuma/>

白井八景

— 詩歌の楽しみ —

村上 勳
(郷土史研究家)

印旛沼には様々な宝がある。そこに育つ動植物はもとより、人々の心を慰める沼の風景がまず宝。それに北印旛沼で詠まれた高浜虚子はじめホトトギス派の俳人の句や吉植庄亮と仲間たちの和歌も沼の財産ならば、西印旛沼の「白井八景」も沼の宝である。

「白井八景」の中の舟戸や遠部、飯野などを訪ねる人、また「八景」に選ばれている地を知る人は多いようだが、実は「白井八景」の真の値打ちは選ばれた光景とともに、そこを詠った漢詩や和歌にある。この添えられた詩歌でこそ、近江八景や金沢八景に勝るとも劣らない「八景」といえるのである。

「白井八景」は今から320年程前、元禄時代に白井の円応寺の僧宋的と白井城主の血を引く信斎によって土地の人々や旅の人に“印旛沼の良いところ・美しさに気づき、大事にしてほしい”との願いから作られたふるさと創生運動であり、また優れた印旛沼の文化遺産というべきものである。

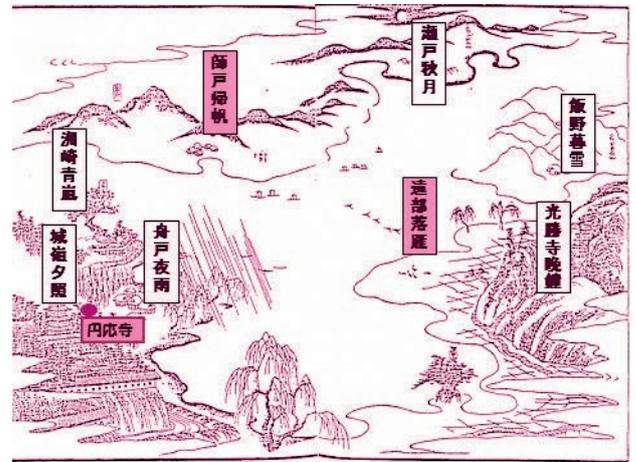
その遺産は、半紙6枚、袋とじ12ページの小誌で寺に納められた後は、住職や檀家の主だった人が目にしていたくらいだったに違いない。佐倉藩士の磯部昌信が目にしたことはわかっているが、書かれて160年後に円応寺を訪ねた赤松宗旦がこれを『利根川図志』の中で紹介するまでは埋もれたままだった。現在、私たちが読むことができるのは、その『利根川図志』が岩波文庫に入り、また崙書房が現代語訳を出版してくれたおかげである。

白井の「八景」は中国の水墨画の画題『瀟湘八景』に倣って選ばれたもので、それを『利根川図志』の中の挿絵で紹介すると、

- ① 舟戸夜雨（夜、静かに雨の降っている舟戸の景色）
- ② 遠部落雁（遠部の砂浜に列をなして飛んできた雁の群れが降り立つ景色）
- ③ 飯野暮雪（遠くに突き出して横たわる飯野の丘、夕

方そこに霏々と雪が降りしきる景色）

- ④ 師戸帰帆（穏やかな印旛沼を対岸の師戸へと帆を張った舟が帰っていく景色）
- ⑤ 瀬戸秋月（対岸の瀬戸村の空にのぼった月が照り輝いている景色）
- ⑥ 城嶺夕照（高台にある白井城の古跡が沈んでゆく夕日に照り映えている景色）
- ⑦ 光勝晩鐘（光勝寺で撞く入相の鐘の音が鳴り渡っていく印旛沼畔の静かな景色）
- ⑧ 洲崎晴嵐（風が雲や霞を吹き払った日の朝の洲崎の景色）



》白井八景図（『利根川図志』より）・・・

この挿絵は、宋的や信斎の時代よりもさらに160年後のもので北斎の作といわれている。それから現在まで、また160年経っている。今、印旛沼やその周辺は姿かたちが大きく変わり、遠部や洲崎などは、もはやその面影さえない。しかし、瀬戸や飯野は、今でも時によって詩歌にあるような光景を目にすることができる。

繰り返すが、白井八景のそれぞれの場所についてはよく知られていても、そこに添えられている宋的や信斎のオリジナルの詩歌については、話題として取り上げられることも少ないようである。地名のみばかりが知られ、宋的や信斎が意としたことが十分に伝えられていないことは、誠に残念である。

先達が「心を濯（アラ）い、詩歌に綴った印旛沼の優れた光景を改めて読み味わってみることは、私たちの心を豊かにするうえでも大事なことだと思う。

ここでは、紙面の関係で漢詩のみを取り上げるが、是非、声に出して読んでみることをお勧めしたい。格調の高さが伝わらと思う。

以下、読み下し文とともに（括弧内のひらがなは著者がつけた）、著者が試みた解釈（太字で記す）を添えて

みる。

① 舟戸夜雨

夜雨蕭々（しょうしょう）タリ舟戸ノ天
深泥路（みち）ヲ封ジテ平田ニ接ス
青燈耿々（こうこう）タリ漁窓ノ外
幾許ノ浴鳧（よくふ）ゾ水辺ニ喧（かまびす）シキ
雨が物寂しく降っている舟戸の夜
田圃まで一面にぬかるみが続いている
漁家の窓から青白い燈が漏れている
どのくらい鴨がいるのか、沼辺がやかましい

② 遠部落雁

行ヲ乱シテ飛雁田疇（でんちゅう）ニ落ツ
蘆葉（ろよう）半バ凋（しぼ）ム遠部ノ秋
稲梁ヲ貧了（どんりょう）シテ饑（きん）ヲ充（みた）
サント欲ス
沙頭（さとう）ニ倦翼且ツ踟躕（ちちゅう）ス
雁が列を乱して田圃に降りてくる
蘆の葉も枯れてきている秋の遠部に
雁たちは米や粟を食んで飢えを満たそうとし
疲れた羽を休めたり、砂浜をうろついたりしている

③ 飯野暮雪

一丘突兀（とつこつ）トシテ気蕭森（しょうりん）
冬嶺ノ青松半（なか）バ陰ヲ落トス
瓊屑（けいせつ）紛々タリ衰日ノ暮
玉龍忽チ見ル波心ニ偃（ふ）スルヲ
突き出た丘はしんと静まり
冬の嶺に松が見え隠れしている
こんこん粉雪が降っている日暮れ時
突然雪の積もった枝が波の中に倒れ込んだ

④ 師戸帰帆

布帆一幅清湾ニ泛（うか）ブ
萬頃（ばんけい）ノ煙波往キテ亦タ還ル
潭面（たんめん）風休ンテ鏡ヲ鑄（い）ルガ如シ
影ハ翠黛（すいたい）ヲ分チテ前山ヲ漬（ひた）ス
帆掛け舟が清らかな沼に浮かび
広々と霧の立ち込める水面を行き来している
風が止むと沼はまるで鏡のよう
山の影をくっきりと映し出している

⑤ 瀬戸秋月

清湖影ヲ漂ワシテ月流ルルガ如シ
残漏光ヲ惜シミテ人楼ニ倚（よ）ル
瀬戸ノ清風令夜ノ景
吹イテ我ヲシテ洞庭ノ秋ヲ嘯（うそ）ブカシム
清々しい沼に月の光がさしている
夜が更けるのを惜しんで皆楼にのぼってくる

瀬戸からの清らかな風、夜の景色が素晴らしい
思わず洞庭の秋の詩を口ずさんでしまう

⑥ 城嶺夕照

空シク見ル平湖ト攢峰（さんぼう）
昔年ノ層閣総ベテ蹤（あと）無シ
孤城ノ返照紅將ニ斂（おさ）マラントス
近市ノ浮煙翠（みどり）ニシテ且ツ重ナル
かつての城は跡形もなく
沼と峰とを空しく眺めているだけ
城を照らしていた陽が沈もうとするとき
町は緑と夕もやの中

⑦ 光勝晚鐘

一遍ノ宗風已ニ儼然
星霜五百有餘年
鐘声遥カニ響ク孤雲ノ外
知ンヌ是称名（しょうみょう）落日ノ前
一遍の教えがしっかりと守られ
もう五百年を経ている寺
夕方のお念仏なのだろう
鐘の音がちぎれ雲の果てへと渡っていく

⑧ 洲崎晴嵐

江山ヲ掃キ尽シテ嵐靄（もや）ヲ絶ツ
朝来ッテ子細ニ洲崎ヲ見ル
翅（はね）ヲ曝（さら）ス鷗鷺（おうろ）平沙ノ上
葉ヲ交ヘル兼葭（けんか）浅水ノ濱
嵐が吹きすぎて霧もすっかり晴れた
朝から洲崎をあちこち回ってみる
砂邊には鷗や鷺が翼を伸ばし
浅瀬では蘆や荻が葉を交えている

》最後に・・・

拙稿を認めるにあたって、「白井八景」を現代語訳された崙書房版¹⁾および幅広く深く考察された立原三知男の諸著作^{2) 3) 4)}を参考させていただいたことに改めて謝意を申し上げます。

》文献《

- 1) 崙書房：口訳利根川図志（赤松宗旦著、阿部正路・浅野通有訳）、第4巻、1980
- 2) 立原三知男：「白井八景」の小世界、白井文化懇話会誌「うすい」、第2号、45-53（1987）
- 3) 立原三知男：白井八景の風光、白井文化懇話会会誌「うすい」、第3号、50-64（1988）
- 4) 立原三知男：印旛沼周辺の風景を詠んだ『白井八景』、印旛沼—自然と文化—、6号、財団法人印旛沼環境基金、27～34（1999）

いんば沼の特定外来生物

高山 順子 (千葉県立中央博物館)

松沢 陽士 (松沢写真事務所)

最近、「印旛沼に生息する外来生物のカミツキガメ」が新聞やテレビでたびたび紹介され、世間を賑わせている。しかし、印旛沼でみられる外来生物は、決してカミツキガメだけではなく、数を含めその他の種類も大変多い。

外来生物とは、自然分布する範囲を超えた地域に人為的に導入、または侵入した生物のことである。現在、日本国内には2,000種類以上の外来生物が定着していると言われていたが、中でも問題となるのは、導入されると地域の生物多様性に多大な悪影響を及ぼす「侵略的外来生物」である。これについては、日本生態学会が「日本の侵略的外来種ワースト100」を公表し、注意を呼びかけている。

また、国内では2005年に法律、通称「外来生物法」を施行し、その中で生態系などへ被害を及ぼす動植物を「特定外来生物」として指定した。この特定外来生物は輸入や飼育だけでなく、移動や野外へ放つことも禁止され、違反した個人には300万円以下の罰金などの厳しい刑罰が科せられている。

本稿では、印旛沼でのカミツキガメの防除作業において仕掛けた定置網やかごワナ(餌を入れ水中に仕掛けるワナ)で捕獲された特定外来生物のうち、水生の動物に絞って紹介する。

魚類……

・オオクチバス(北米原産)

一般にはブラックバスの名で知られ、釣魚として人気が非常に高い魚種である。口は名のごとく大きく、主に小魚やエビ、水生昆虫を捕食するため、在来の生物群集に深刻な影響を与えている。

印旛沼では1980年代よりみられるようになり、一時期、激増した。その後は減少しつつあるものの、今でも一定数は生

息している。カミツキガメ捕獲用の定置網には様々な大きさのオオクチバスが入り、稀には全長50cmを超える大型個体が捕獲されることもある。



・ブルーギル(北米原産)

オオクチバスに近縁のサンフィッシュ科に属し、鰓蓋の濃青色の模様が特徴である。本種は口が小さく、餌は魚卵や仔稚魚を好むが、一方では水草のような植物も食べる雑食性である。産卵の際には、オスが巣を作り、卵・仔魚を守る習性がある。

印旛沼では1970年代後半から確認され、今もカミツキガメ捕獲用の定置網やかごワナによくかかる。定置網には婚姻色の現れた全長20cmを超える大型オスが捕獲されることがある。

・チャネルキャットフィッシュ(北米原産)

アメリカナマズの通称で知られ、小魚やエビ、貝類などを食べる肉食性である。背びれと胸びれに鋭い棘があり、不用意につかむと刺されることや、棘が漁網に絡まるために漁業者には厄介者扱いをされている。

印旛沼では、近年、とみに増加しており、今後の個体数の動向に注意が必要。カミツキガメ捕獲用の定置網には、しばしば全長60cmを超える大型個体が掛かる。

・カダヤシ(北米原産)

「蚊絶やし」に由来する和名を持ち、国内には1916年に蚊の幼虫のボウフラを退治する目的で台湾より導入されたが、姿がよく似るメダカ(千葉県に分布するのはミナミメダカ)と間違えられることが多い。

本種は印旛沼周辺の水田脇の水路等で春から秋にかけて群れて水面近くを泳ぐのが見られる。

・オオタナゴ(中国大陸原産)

タナゴの仲間はイシガイ科の二枚貝の中に卵を産む習性があり、本種の卵や仔魚が混入した淡水真珠養殖用のヒレイケチョウガイの輸入や、観賞魚の遺棄により導入されたと考えられている。

これまでに北沼を中心に確認されているが、2015年には神崎川に仕掛けたカミツキガメ捕獲用のかごワナで混獲されている。印旛沼では、二枚貝が著しく減少しているため、本種の急激な増加はみられない。2016年10月に新たに特定外来生物に指定された。

・コウライギギ(中国大陸原産)

国内では2008年に茨城県の霞ヶ浦で初めて捕獲され、その後利根川水系の広い範囲にわたって相次いで確認されている。

印旛沼の漁業者の話では、本種について、「初めて見たのは2年前(2015年)くらいで、その時は、アメリカナマズの稚魚かと思った」といわれるほど、実際、両種はよく似る。オオタナゴとともに、2016年10月に新たに特定外来生物に指定された。

》》》 その他の動物……

・カミツキガメ(北米原産)

印旛沼水系では1978年にはじめて、高崎川で発見された。雑食性でザリガニや魚類などの他に、アシの根などの植物も食べる。習性としては水中に潜んでおり、俗にいう甲羅干しはしないが、5~6月頃に地上を移動することがある。

印旛沼の周辺では、5月の終わりから6月の中旬までの限られた期間で産卵することがわかってきた。卵は水路などの土手に穴を掘り産み落とされる。大型のメスだと、50個近くの卵を産むこともある。

現在は沼や流入河川だけでなく、水田の水路まで広範囲にわたって生息する。本種が国内で大規模に繁殖している場所は、印旛沼水系の他にない。

・ウシガエル(北米原産)

大型のカエルで、国内には1918年に食用として導入された。そのため、「食用ガエル」とも呼ばれ、かつては印旛沼周辺でも食用に捕獲されて、アメリカに輸出されていた。沼の岸や周辺水路のアシの間から「ブオー、ブオー」という大きな鳴き声が聞こえてくる。食欲が旺盛で、昆虫、ザリガニ、魚類、カエルなど口に入るものはなんでも食べる。

・ウチダザリガニ(北米原産)

低水温の河川や湖沼に生息する種である。印旛沼では2009年から翌年にかけて、長門川周辺で15匹捕獲されたが、その後は確認されていない。食性は、魚類や甲殻類から水草まで捕食する雑食性であるため、定着すれば生態系への影響が大きい。

・カワヒバリガイ(中国大陸原産)

淡水性の二枚貝で、足糸と呼ばれる糸を出し水中の岩などに付着する。利根川本流では、既にコンクリート護岸のような人工構造物や、アシの根などにびっしりと付着し、定着している。印旛沼では数が少なく、本種が見つかる場所は限られているが、水道施設の導水管の中に付着すると、取水阻害をもたらすことになる。

【おわりに】

かつての印旛沼は、水は透き通り、多種多様な水草が水中をたなびき、ウナギやザッコなどがいくらかでも獲れたと聞き及ぶ。現在は、それからはほど遠い姿となってしまった。しかし、外来生物をはじめとする、印旛沼が抱える様々な問題をひとつずつ解決し、何時しか印旛沼の在来種からなる生態系を再構築することを諦めないでいたい。



いんば沼

—ここ数年間における 水質悪化の原因—

本橋 敬之助 (農学博士)
公益財団法人印樞沼環境基金

いんば沼における最近の水質状況をCODでみると、第1図に示すように、平成15～22年度は平成19年度の11mg/ℓを除き、概ね8.5mg/ℓ前後で推移していた。しかし、平成23年度には11mg/ℓと急激に増加し、この高い状態が最新の結果が公表された平成27年度現在まで継続すると同時に、環境省が発表する全国湖沼水質測定結果では、連続してワースト1であった¹⁾。

ここで、上述の平成23年度における急激なCODの増加原因については、当環境基金の雑誌「いんば沼」第35号(H26年5月発行)に掲載した著者の拙論で、“平成23年度におけるCODの急激な増加は流域での降雨が少量であったことに起因して沼への流入水量が減少、そして滞留時間が長じ藻類の大量生産を招いた結果と考えられる”と、指摘した。また、同誌第36号(H27年5月発行)では平成24年度のCODが平成23年度と同じ11mg/ℓと、高い値を示したことに関連して、“いんば沼におけるCODは、基本的には流域での降雨量と密接に関係する流入水量の多寡に大きく依存している”と、結論した。

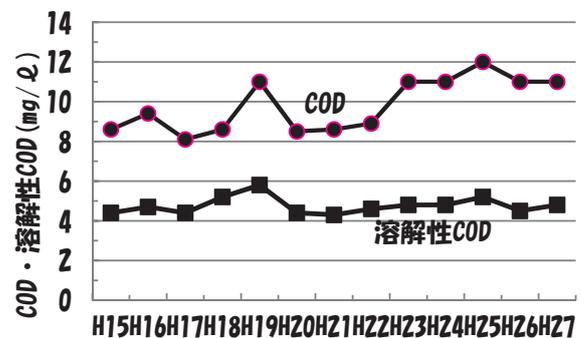
今回は、このように、いんば沼のCODの増減が、果たして流域における降雨の多寡に伴って生じる沼での付随的要因の変化によってもたらされた結果とみなせるのかどうかについて、ここ数年間における高いCODの横ばい傾向との関連で再度、検証してみる。

》》 沼水におけるCODの源……

沼の中におけるCODの源は、巨視的には流入河川や陸域から直接流出する溶解性CODと、沼の中で発生した藻類(季節によって優占的に出現する種類、例えば、春季は珪藻類と緑藻の混合種、夏季はアオコと称される藍藻類、秋季～冬季は珪藻類とそれぞれ異なるが、これら種類の変化とCODの増減とは、直接、関係はない)、所謂専門用語でいうところの内部生産CODの二つに分けられる。

このうち、溶解性CODは、第1図に示すように、年度ごとにおける変化は4.4～5.2mg/ℓ(平均:4.7mg/

ℓ)と、大差はなく、結局は、藻類発生の多寡、要するに内部生産が沼のCODの増減を大きく左右するとみなせる〔(内部生産COD = COD - 溶解性COD)の式より算出〕。



第1図 西印樞沼のCODと内部生産

実際、沼のCODに対する内部生産の割合をみると〔(内部生産COD/COD) × 100 (%)〕、CODが低く推移した平成15～22年度(平成19年度を除く)は平均で46.3%、そしてCODが高く推移した平成23～27年度は57.0%と、明らかにCODが高い年度で大きい。

》》 内部生産(藻類の発生)に及ぼす要因……

沼における内部生産は(以下、同様の意味を持ち理解し易いことから、単に藻類と称する)、流域における降雨量と深く関係、要するに流域における雨量の多寡は沼に流入する水量を決定づけ、そして流入量の多少は沼の中における滞留時間の長短を左右し、さらにはその長短は藻類の発生に影響を与える気温や日照時間等の気象要因と相まって、藻類の発生を助長あるいは抑制し、最終的にはCODの増減に大きく関与するという構図に基づいている。

1) 流入水量の藻類に及ぼす影響

もとより、いんば沼は治水を含めいろいろな用水源(農業、工業、上水等)として利用されているため水位は年間をとおして一定に維持、すなわち沼への流入水は、その多寡によって利根川に自然排水或いはポンプによって強制排水、または利根川から長門川を通しポンプで揚水して沼に注水し、計画水位が常に管理されている。

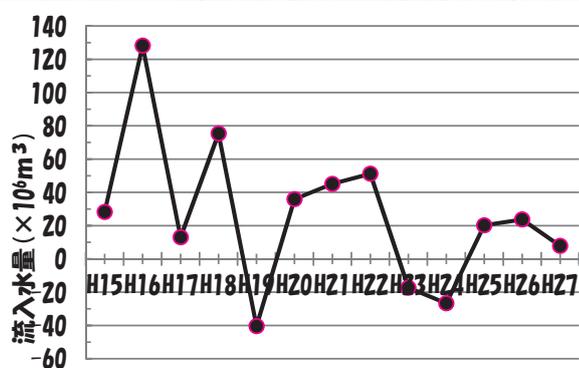
一方、流入水の滞留日数は、その多寡に基づき、流入水が多量の場合は滞留日数が短くなり、沼で発生した藻類の流出を促進させると同時に、藻類の発生を抑制し、自ずとCODは低く抑えられることになる。また少量の場合は、逆に滞留日数が長じ藻類の発生を助長することになる。

第2図は、年度別(H15～H27年度)における沼への流入水量と累年度(昭和44～平成27年度)の平均流入水量(403.4 × 10⁶m³、以下、累年平均と称す)の差を示している²⁾。これをみるとCODの低かった平成

15～22年度（平成19年度を除く）の平均（ $457.2 \times 10^6 \text{m}^3$ ）は累年平均に比べ13.4%（ $53.8 \times 10^6 \text{m}^3$ ）多い。これに対し、CODが急激に増加した平成23年度（ $386.0 \times 10^6 \text{m}^3$ ）および平成24年度（ $376.5 \times 10^6 \text{m}^3$ ）の流入水量は累年平均に比べそれぞれ4.3%（ $17.3 \times 10^6 \text{m}^3$ ）、5.0%（ $26.8 \times 10^6 \text{m}^3$ ）少ない。一方、また平成25～27年度の平均（ $420.3 \times 10^6 \text{m}^3$ ）は累年平均に比べ4.3%（ $17.3 \times 10^6 \text{m}^3$ ）多いものの、流入水量としては、総じてCODが高い年度で少ない傾向を示している。

ちなみに、CODが高かった平成19年度における流入水量（ $362.9 \times 10^6 \text{m}^3$ ）をみると、累年平均に比べ10%（ $40.5 \times 10^6 \text{m}^3$ ）も少なかった。

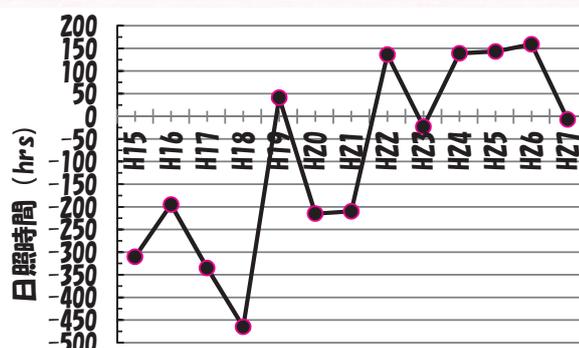
このようなことから、流域での降雨、引いてはそれによってもたらされる沼への流入水量の多寡はいんば沼におけるCODを左右する大きな要因の一つとしてみなせる。



第2図 年度別における流入水量と累年平均との差

2) 気象要因の藻類に及ぼす影響

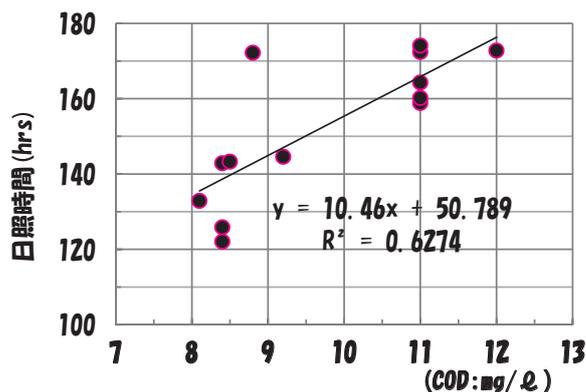
一般に、藻類の発生に及ぼす因子としては、基本的には窒素、りん等の栄養塩類、気（水）温、光合成作用を促す日照、そして水の流速（滞留時間）である。このうち、いんば沼の栄養塩類については超富栄養化と準えるほど豊富であり、一方水温はH15～H27年度の各年度における月別平均の積算値は、171～185℃の範囲に収まりさほど大きな変化がないことから、藻類発生の増減要因としては決定打に欠く。残るは、藻類の増殖（光合成作用）に必須要因である日照時間である。



第3図 年度別日照時間の累年平均との差

第3図は、年度別における積算日照時間（以下、日照時間と称す）と累年度（S56～H22年度）における平均積算日照時間（1,930hrs、以下、累年平均と称す）との差を示しているが³⁾、巨視的にはCODの低い年度（平成19年度を除くH15～H22年度）における日照時間は平均（1,702hrs）で累年平均より227時間少なく、そしてCODの高い年度（H23～27年度）は平均（2,012hrs）で累年平均に比べ82時間多い。

一方、これに関連して、各年度別平均（H15～H27年度）のCODと日照時間の関係を見ると、第4図に示すように、高い相関がみられる。



第4図 年度別平均のCODと日照時間

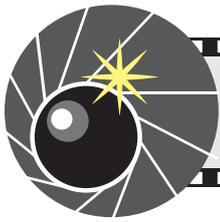
結局、以上のような結果を鑑みても、いんば沼の平成23～27年度のそれぞれにおける高いCODは、流域での降雨が少なかったことによって流入水量が累年平均に比べて少ないことに加え、藻類の光合成を促す日照時間が累年平均を上回って長かったことの原因が考えられる。

》》 おわりに……

近年における降雨量の極端な多寡やそれに関連する日照時間の長短等に係わる気象要因の動向は今後も続く、まさに温暖化がもたらす人事の尽くし難い現象である。と、するならば、今後、いんば沼のCODを減少させる対策としては、現在、沼の中に豊富にある窒素やりんの栄養塩類を削減する以外に何も無い。恐らく、これも一筋縄では行かない、と思われる。いずれにせよ、いんば沼のCOD対策は、今のところ、五里霧中の状態、否、背水の陣である。早く、助け船を出さなければならないのだが……！

《文献》

- 1) 千葉県：千葉県公共用水域及び地下水の水質測定結果（平成15年～27年度）
- 2) 独立行政法人水資源機構：水資源開発施設等管理年報（第35～47号）
- 3) 気象庁：アメダス佐倉（2003～2016）



いんば沼を撮る — 秋：二題 —



《写真提供：飯塚秀保(写友いには・会員)》



《写真提供：鈴木康雄(写友いには・主宰)》

上の写真は、印西市平賀の田圃で撮った乳・肉用牛の飼料に供するため、稲(茎と子実)が結実する前(糊熟期～黄熟期)に収穫して調整したホールクロップサイレージ(発酵粗飼料)。聞き慣れない言葉、見慣れない光景だが、これは水田転作の一つとして水田農業と畜産業が融合し分業で行う、すなわち水田農家が稲を育て、そして畜産家がそれを刈り取り飼料に調整したものである。

下は、晩秋の風物詩ともいえる落花生のボッチ。

ボッチはボッチでも、屋根に相当する部分は稲藁で被われ、全体がしっとりとして自然にとけ込み神秘的な景観を残している。それに比べて、今どきのブルーシートを被せられたボッチは風情の欠けらも・・・。

編集雑記

ある新聞の朝刊に中年の女性から投稿された“電車の中の香水は迷惑です”というオピニオンがあった。

要所を抜き書きすると、「私は、体臭など自然なおいには気になりません。ですが、人が好みで身につける香水は苦手です。…ご本人は良い香りと思っているのでしょうか。でも、つけ過ぎれば、好みでない人にとっては迷惑でしかありません。……お願いします。電車の中では香水を控えめにしてください。」と、いうことであった。

これを読んで、「あれ！どこかで似たような内容で認めたエッセイを読んだ覚えがあるなあ～」と思いつき、早速、疎らな本棚を漁った。

それは、浅田次郎著の「君は嘘つきだから、小説家にでもなればよい」〔株式会社文藝春秋、2011年発行〕の第5章(151～156頁)に“日本人の嗜み”という題の中に綴ってあった。

浅田は、先ず「嗜み」という言葉の意味には「好きこのみ」のほか「心がけ」、「マナー」といふニュアンスも複合されている。……すなわち、「好きなものをよい心がけで味わう」ことをいうのである、と注釈し、そして「嗜み」の一つとして、「身嗜み」を取り上げ、“満員電車の中で、異臭ぷんぷんたるオヤジや香水の匂いを散らす女性と肩が触れるのは不愉快きわまりない。「身嗜み」は今では「おしゃれ」と同義になっているが、本来は「他人に不快な思いをさせぬようわが身を嗜むこと」であると、記している。

とにもかかわらず、嗜むとは、先ずは他人に対し如何なる不快感も与えないという心構えがあって、その上でようやく個々の行為が許されると理解されるべきであろう。この意味では、冒頭のオピニオンで文末の「お願いします」は、本来ならば、無用な言葉であるはずであるが、…。

最近では、自分自身が良ければ何でも“有り”という風潮を世間は苦々しく思いつつも目溢している嫌いがある。一例に過ぎないが、自転車で歩道を猛スピードで駆け抜ける、電車内で他人の鼻を擦るほどパウダーを撒き散らしての化粧や、飲み食い、また携帯電話を凌ぐ声高らかなおしゃべりなどなど、である。

まったく、傍迷惑である。嗜みは、い・ず・こに…！

(K.moto記)

編集：公益財団法人 印 旛 沼 環 境 基 金

発行：平成29年5月31日

〒285-8533 千葉県佐倉市宮小路町12番地

TEL：043-485-0397 FAX：043-486-5116